
ISの一存

tyta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISの一存

【Nコード】

N7264T

【作者名】

tyta

【あらすじ】

勢いでやってしまった・・・

生徒会の一存とISのコラボ作

ISの世界に送られた杉崎鍵と椎名深夏が活躍する話。
駄文ですがよろしく願いします。

「話「それは一瞬だった」

「おい、鍵！鍵！」

誰かが俺を呼んでる声がある。

「いい加減起きろよ、鍵！」

とりあえずまだ眠いからこのまま寝ていようと思った瞬間・・・

「起きろって言うてんだろ！！」

ゴス！！

「ぎゃーーーーー！！！」

何だ！いきなり腹の中をかきまぜられたような痛みが！

俺の知ってるやつでこんなことができるのはただ一人

「お、やつと起きたか。」

「いや、起きたかじゃなくって危うく永眠するところだったぞ、深夏。」

そう言っただけを見るとそこにはやはりクラスメートの椎名深夏がいた。

「大丈夫、鍵。ただ内臓をかきまぜただけだから。」

「いや、それは大丈夫とは言わないから！」

「まあ、鍵が生きてようが死んでようが関係ないけど・・・」

「酷！」

「それよりも鍵。ココがどこだかわかるか？」

「へ？」

そう言われて俺は周りを見渡してみて

「ここどこ？」

なんか闘技場みたいな場所にいることに気がついた。

「って、ちょっと待てよ！俺たち生徒会室に向かったよな！」

「そうだ、あたしが覚えているのは、HRが終わってから鍵と一緒に生徒会室に向かっている途中で何か光ったところまでだ。」

「ああ、そこまでは俺も覚えてる。そのあといったい何が・・・」
それは、私が説明するよ。』」

いきなりどつかから声が聞こえてきた

「どこから聞こえてきたんだ？」

『ここだよ、あなたの腕だよ。』

「腕？ってなんだ？このブレスレットは？」

「ん？あたしの腕にもついてるな。」

声の言う通りに腕を見ると俺の手首には青色のブレスレットが付いていた。

深夏の手首にもブレスレットが付いていてこっちは黄色だった。

「このブレスレットがしゃべったのか？」

『そうだよ。とりあえず自己紹介しとくね。私の名前はユウ、遊ぶ兎と書いてユウだよ。』

「ユウさんですか。俺はハーレム王の杉崎鍵と言います、でこっちが俺のハーレム」「ふっ！」「ぐは！」

「変な紹介するな。あたしはそこで倒れているのと同じ生徒会役員で副生徒会長の椎名深夏だ。」

『よろしくね。深夏、鍵。』

俺が倒れてる横で深夏とユウが自己紹介をしていた。

「ところでここはどこなんだ？」

深夏がそう聞くとユウが

『ここは深夏たちが居たのとは別の世界、ISの世界だよ』

「「へ？」」

衝撃的な告白だった。

『ちなみに飛ばしたのは私だけだね。』

「「何だつて！」」

『まあ、それは置いて。』

「「置いてくのかよ！！」」

『とりあえずこの世界の説明をしようか。』

そうして勇から語られたのは驚くべきことだった。

『まずこの世界にはISっていうものがあるよ。』

「ちょっといいか、そのISっていうのは何だ？」

『ISって言うのは正式名称インフィニット・ストラトスって言うこの世界にあるパワードスーツ？』

だったけかな。とりあえず今から10年ほど前に篠ノ之束って言う人が作った物だよ。世界に467個

しかないコアを核に使って作られてるんだよ。』

「へへ。そうなのか。」

『うん、でもこのISには欠点があるんだよ。』

「欠点？」

『ISはどういう訳か女性にしか動かせないんだ。そして今この世界はISの動かせる女性の方が偉いとされる女尊男卑の世界になっているの。』

「女性にしか動かせないのか。」

『まあ、一人だけ例外がいるけどね。』

「へ？男で動かせるやつがいるの？」

『そう、それでこつからがあなたたちを呼んだ理由。今この世界に居る唯一の男性操縦者【織斑一夏】を守ってほしいの。』

「守る？つてことはだれかに狙われているってことか？」

『うん、世界中の国からだけじゃなくあなたたちの居た世界の【企業】とかからも。』

それを聞いて俺たちは驚いた

「なんで俺たちの世界の人がこの世界に干渉してるんだよ！」

『それは、【企業】が世界の中心を見つけた時にこの世界のことを知ってしまったから。』

「世界の中心だって？あれって鍵の妄想だろ？」

『いいえ、違うわ。世界の中心は実際にあの場所にあったの。それを知った【企業】が利益を得るために碧陽学園に潜入していた。だけどそれを知った鍵によって止められた。だから【企業】は新たに利益を得るためにISを作ろうとした。』

「だけどISは女性にしか動かせない。それだところちの世界と同じような世界になってしまう。」

「そうか、だから【企業】はISを唯一動かせる男をさらって男でも動かせるのを作ろうとしているのか。」

『そう、だけどISの力は使い方によっては兵器にもなる。下手したらあなたたちの居た世界で戦争が起こってしまふだからそうならないように協力して欲しいの。』

「いいぜ。世界を守る戦い。燃えてきたぜ！！」

「俺も、女の子の悲しむ姿とかを見たくないからな。協力するよ、コウ。」

『鍵、深夏。ありがとう。』

「いって、それよりここはココはどこなんだ？見たところ闘技場みたいだが。」

『ここはIS操縦者を育てるIS学園の闘技場だよ。』

「何だって！IS学園だと。」

それを聞いた瞬間俺は思わず叫んでしまった。

「うわ、どうしたんだよ、鍵。いきなり叫んだりして。」

「だって深夏。IS学園だぞ、ISに乗れるのは女性だけと言うことはここには女性しかいないまさに夢の学校じゃないか！」

そう、俺にとってここは夢のようなところ。

「でも鍵。ISは女性しか乗れないんだろ？ならお前は乗れないからこの学校には通えないぞ。」

「なん・・・だと・・・」

そんな、目の前に楽園があるのに俺は入れないのか。

『大丈夫だよ。鍵もIS乗れるよ。』

「へ？」

『鍵と深夏の腕についているのが待機状態の2人のISだよ。』

「このブレスレットがISなのか。」

『うん、とりあえず念じれば動くよ。鍵のが暁、深夏のがライジングエア。でもまだうごくなら、来い！』

ライジングエア！」ってちよつと！！』

深夏がユウの説明を無視して起動した瞬間、深夏を包むように閃光が走りISが表れた。

「すっげー！いいなこれ！」

そう言って深夏がはしゃいでるといきなりアラートが鳴り始めた。

「話」それは一瞬だった」（後書き）

はい、と言う訳で始めました「ISの一存」これからどんどん書いていくつもりなので応援お願いします。
感想も待ってます

二話「IS学園教師との追いかっこ その1」(前書き)

とりあえずできたから投稿

機体の説明は次回辺りでやる予定です。

二話「IS学園教師との追いかっこ その1」

「な、なんだ?!」

『はー、だから待ってて行ったのに。私たちは所謂侵入者なんだよ。それなのにいきなり登録されてないコアのISが出てきたら警戒ぐらいされるよ。』

「とりあえずどうすれば。」

俺が、ユウに聞いた時、

「とりあえず武装を解除しろ。」

後ろから何か固いものが首筋にあてられました。

「・・・・・・・・・・・・は?」

おかしな?ここには深夏と俺とユウ以外に誰もいないはずなんだが・
・

「聞こえなかったならもう一度言っ。武装を解除しろ。」

「なあ、深夏。」

「何だ、鍵?」

「今俺はどんな状態?」

「そうだな、動いたら首と体がさようなら、ってところか。」

そうか首と体がさようならか・・・

「・・・とりあえず助けてください。」

「大丈夫だよ、鍵。お前だから。」

「何そのいらぬ信用！首切られたらさすがに死ぬから！」

「灰になってもよみがえったやつが何を言う。」

「とりあえず、どうにかして。」

「いや、無理そう。だってお前の後ろの人あたしと同じぐらいの強さだと思う。」

深夏と同じ強さ？地球に居るんだそんな人が・・・

「今失礼なこと考えなかったか？」

後ろの人からのプレッシャーが増しました。

「とりあえず、逃げろ！！」

そう言っただけ俺が走り出した瞬間・・・

「逃げさない！！」

後ろの人もおってきました。

「深夏、追ってくるぞ・・・って居ない!？」

『ケン、上!』

「上？」

さっきまで黙ってたユウがそう言うので上を見ると・・・深夏がISで飛んでいた。

「おい。鍵、お前も飛んでみるよ。結構速いぞ。」

「そう言えば俺もIS持っていたな。」

つと言うことでアカツキを起動させて逃げることにしたんだけど

「なんか沢山のISに囲まれてしまいました。」

「? 鍵、誰に言ってるんだ？」

そんなわけで今学園の上空で打鉄6体と戦ってます。しかも遠くからラファール・リヴァイヴが

銃で撃ってくるんで避けるのが大変

「とりあえず、どうしようか? 深夏」

つと聞いてみたがいか答えは決まってるよな

「もちろん全員倒す! 6対1+雑魚。圧倒的に不利なこの状況の中一人で敵を倒しまくるあたし。」

くく、燃えるぜ！」

「ちょっと待て！雑魚とはなんだ、雑魚とは！」

「？鍵だけど、なにか？」

「何当たり前のこと聞いてるんだこいつ？、みたいな顔して言うのやめてもらえませんかね！」

そう言ってるうちにまた打鉄が攻撃してきたので、

「深夏お前は、左の3体をやれ！俺は右をやる！」

「しかたねえな。終わったらそつち手伝いに行くからそれまでは、持ちこたえろよ。」

そう言っただけで俺たちは自分たちの敵と戦うために右と左に別れたのだが、

「何でこっちに5体も来てるの！？」

俺の方に5体来ました。しかもラファールまでこっちに狙いを定めてるし

「とりあえず、ユウ。この機体の武器は？」

『拳だけだよ。』

「……は？」

『だから、深夏とケンの武器は拳だけだつて。』

「いやいやいや！死ぬから！深夏はともかく俺は死ぬから！」

何その武装、イジメなの、ねえ、イジメなの？

『あとケンの機体はエネルギーを使って攻撃できるよ。』

「・・・俺、生きて帰れるのかな？」

こうして鍵と深夏の最初のバトルが始まった。

二話「IS学園教師との追いかっこ その1」（後書き）

次回は「IS学園教師との追いかっこ その2」鍵の戦いをやる予定です

鍵と深夏の武装は最初は拳だけ第一形態からは深夏は刀、鍵は盾と刀と銃という風に考えています。

あと、アンケートです。

一夏を深夏に鍛えさせて強くしてもいいですか？
感想待ってます。

三話「IS学園教師との追いかっこ その2」(前書き)

遅くなってしまうって申し訳ありません。

とりあえず今回は深夏視点です。

三話「IS学園教師との追いかっこ その2」

深夏の場合

今あたしが戦ってる奴は1人だけ、だがそいつがめちゃくちゃ強い。

「当たれー！ー！」

そう言つてあたしが繰り出した拳を首を動かすだけで避けて、さらに手に握っていた剣をこっちの心臓めがけて突いてきた。

「くっ！」

とりあえず後ろに飛ぶようにして避けたが相手も追いかけてきて突きを連続してくる。

速さではこっちの方が上のはずなのに相手には当たらない。

鍵の方は6体に追われている。早くこいつを倒して、鍵の方に行かなくては…って危な…！！

何の躊躇いもなく頭狙ってきたよ！

「と言うよりなんで武器がないんだよ！」

そう一人で叫んだ瞬間

『武器がないのはユウが作り忘れたからだよ』

つとどつかから声が聞こえてきた。

「「は？」」

突然聞こえてきた声にあたしと相手―多分さっき鍵の後ろにいた人だろう―が動きを止めた。
今の声どっから聞こえてきた？

『後ろだよ、後ろ』

後ろ？とりあえず振り向いてみると空に人が浮いていた。

「お、舞空術か。」

『違うから！そこ普通は驚くところだから！』

「え！」

『何その反応！普通人が浮いてたら驚くでしょう！』

「えー、だっていつも鍵が飛んでるの見て見なれてるからいまさら人が飛んでるくらいじゃね。

それに舞空術だったらあたしも使えるし」

『あれは飛んでるって言わないから！吹っ飛ばされてるだけだから！そして普通の人は飛べないから！』

「おい。」

あたし達が話していると打鉄に乗ってた人が話しかけてきた

「『うん？』」

「とりあえずお前は誰だ。」

『僕は式見螢。彼女たちをこの世界に連れてきたりISを作ったりした一人さ。』

「この世界に連れてきただど？」

『そう、もともと僕も彼女たちもこの世界の人間じゃない。ある理由からこの世界にやってきたんだ。』

「さっきISを作ったて言ったな」

『うん、それは僕ので作ったものだよ。』

「お前の能力だど？」

『そう、僕の能力＜物質化＞の力で作ったんだよ。』

「＜物質化＞？」

『うん、僕は半径1cm内の霊体を物質化させることができる。』

「霊体？」

『僕の魂の一部を幽体離脱と同じ要領で体の外に出すんだ。後はそれをどんな形にするかイメージして形と性質を設定した。そうやってISのコアを作り物質化能力のかけらを埋め込んだのさ。』

「すげー！守の微妙すぎる超能力と違う完璧な異能じゃん！」

『で、コアを作った後機体を組み立てただけど・・・武器を担当していたユウがね・・・』

「?どうかしたのか。」

『いや、アニメ観るので忙しくてできてないって君たちを送った直後に行って来たんだ。』

「・・・・・・」

『だから君と鍵の機体には武器がないんだ。その代わり他の機体にはないような機能がたくさんあるけどね。』

「そ、そうか。」

「なんというか、お前も苦勞して居るんだな。」

『ありがとございます。まあ、そう言う訳でこっちに戦う意思はありません。』

そうケイが告げると打鉄に乗ってた人は武器を消して

「わかった。ならこの場は終わるとしよう。一応あとでもっと詳しい事情を話してもらうことになると思う。」

「事情聴取か。そう言うのは鍵の方が得意だな・・・そう言えば鍵は?」

『さっきあっちの方に逃げて行っただよ。』

そう言ってケイは右の方を指した。

やばい、戦いに夢中であいつのこと忘れてたよ。

「ま、ゴキブリよりしぶといから大丈夫だろ。」

『いや、助けに行こうよ!』

「とりあえずあっちに向かった教師には攻撃をやめるように言っておこう」

こうしてあたしの初めてのIS戦は終わった

「む・・・」

「どうしました?」

「通信がつかない。」

「・・・」

とりあえず急いで鍵と合流するとしよう。

三話「IS学園教師との追いかっこ その2」(後書き)

どうだったでしょう？

バトルが異様に少なくなりましたが、とりあえず武器のない理由が判明

次回は杉崎視点

後一夏の機体が変わります。そして一夏自身も強くなる予定です。

四話「IS学園教師との追いかっこ その3」

杉崎の場合

さて深夏と二手に分かれたとこまではいい。だが、

「何でおれの方に6人も来てるんだよ!!」

そう追いかけて来た打鉄6体の内の5体とラファール1体が俺の方に来ている。何で？普通半分に分かれるんじゃないの？

ってそうこう言ってるうちに2体が追いついてきて剣を振ってきた。それに対して俺はとりあえず避けまくる。うん？何で反撃はしないのかだつて？

俺のISであるアカツキには初期装備がない。なぜないかさつきユウに聞いたところ

「作ってる途中でアニメが始まる時間になったから。」

要するにアニメを見ていて武装を作り忘れたらしい。ちなみにこの機体特殊な機体らしくシールドエネルギーを一点に集中させ攻撃にまとわせたり防御力を上げることができるらしい。

ただそれでも俺は攻撃しない。何故かつて？相手は美女。美女にけがさせるなんてハーレム王失格だからだ！

っと、危ない危ない。話がずれるところだった。

そう言ったこともあって俺は今攻撃を避けるだけなんだが何分相手の数が多いのと相手の動きが早いから、いくつかの攻撃は当たってしまう。

なんとかしてこの場を乗り越えようと思って考えても、打開案が思いつかない。そんなことを考えてると、左右から打鉄が迫ってきた。

た、とつさに避けようとする後ろと前から来ている。

ヤバい避けられないと思った時にはもう遅く、俺は4体の打鉄の攻撃をくらってしまった。

「ぐっ!!」

すさまじい衝撃が体を襲い機体がダメージを知らせてきた、ってえ？ダメージがたったの20だって！

相手の方にも機体状況がいったのかかなり驚いている。そう言えばユウがこの機体は防御に特化してるって言ったけどここまで特化してるとは思わなかった。

そうこうしてるうちにまた教師たちが迫って来たけどそこに、乱入者が現れた。

「双方、武器を収める！」

この声は、さっきおれに剣を当ててた人だな。

「おーい鍵、大丈夫か。」

「おー深夏、こっちは大丈夫だ。そっちも怪我はないか？」

「あたしはあまり戦わなかったからな。それより鍵、紹介するよ。ユウと一緒にこの世界にあたし達を送ってきた一人の式見螢だ。」

そう言つて深夏は後ろの男を指差した。

「な、舞空術だと！」

『 違うからね！ 何でこの人たちは人が浮いてたら舞空術だと思っの！ 僕はいたって普通の幽霊だから！ 』

「「 なんだ、幽霊かって、そっちのほうがすごいわ！ 」 」

これがでこの世界を救うために来た4人が集まった。

物語は今ここから始まる・・・

『 ちなみにユウは神だよ 』

「「 え〜〜〜 」 」

『 何でそこで残念そうな声出すの！ 』

四話「IS学園教師との追いかっこ その3」(後書き)

tytaです。

最近もう一個小説を始めたので更新がさらに遅くなると思います。
それでも一生懸命書くのでよろしくお願いします。

事情聴取（前書き）

かなり遅くなりました。

事情聴取

教師たちとの鬼ごっこから解放された俺たちは今事情聴取をうけていてケイが俺たちがこの世界に來た理由を説明してくれる。

『と言う訳です。』

「いや分かんないからね！ いきなり」言う訳です。『って言われても普通分かんないから。」

全然わからなかった。こんなので通じるわけ・・・

「ふむ、なるほど。それでお前たちはその 企業 の連中を追いかけてきたと。」

『「「「通じちゃった！？」」「」』

あった。 何この人無駄にスペックが高いんですけれど。

「で、そのく企業」と言う連中は私の一夏を狙っていると。」

『そういうことです。』

『「「ちよつと待てー！」「」』

『「「？」「」』

「「「「？」「」じゃないでしょー！」「」

「あんたら兄弟でしょう。」

『ケイ、ちよつとは疑問も追うよ。』

織斑先生の言葉に俺と深夏、ユウが叫ぶと

『「え？ 弟（妹）のことを愛するのって当然だろ。（当然でしょ。）」「』

「そうだね。」

『同意するの!?!』

「駄目だこいつら、早くなんとかしないと」

そんなこんなで事情聴取が終わり俺たちに部屋が与えられたが問題がひとつ。ケイは深夏のISに取り憑いてるため深夏と同じ部屋になる。

まずいそれだけは避けないと。

「とりあえずISはこちらで預かっておく。」

「織斑先生、ナイス！」

とりあえず何とかなったな。 後は俺が深夏の部屋に忍び込めば・

・

「そうだ杉崎、夜中に出歩こうとするなよ。出歩いたら分かってるよな?。」

「H A H A H A ! し、紳士である俺がそんなことするわけないじゃないですか。」

計画は中止だ。くそ、完璧だと思ったのに。

「いや、来てもお前をぶっ飛ばして終わってたと思うが。」

深夏がなんか言ってたけど絶望の真っただ中にいる俺には聞こえなかった。

「それと入学式は来週の月曜だからそれまでに必要な知識を詰めておけ。」

そう言っただけ渡されたのは

「「タウンページ?」」

そう思うほど厚い本3冊だった。

「それをすべて覚えろ。」

「いや無理でしょこんなの!」

「杉崎。」

「何でしょうか。」

「これをすべて短期間で覚えたと知ったら女子から好かれるぞ。」

「!?!」

「そして椎名。」

「お？」

「これを覚えてIS戦で頑張ればお前なら世界大会に出れるかも知れないな。」

「！？ 世界だと。」

「「ならやるしかないな！」」

そう言っ て俺たちは勉強をして入学式までを過ごしました。

ちなみに俺はあれを20時間かけて読み武器の作り方を勉強していました。

こうして俺たちの最初の一週間が過ぎて行つた。

事情聴取（後書き）

次回からは学園編です。
よろしく願います。

自己紹介（前書き）

遅くなりました

自己紹介

杉崎 side

「遂に、遂に来たぜ、IS学園!!」

俺は今夢のような光景を見ている。周りを見れば美女、美女、美女、美女!!

「一週間我慢していたかいがあつたな」

此処から俺のハーレムがさらに広がって行くかと思うと……ぐふふふ」

「鍵、何気持ち悪いこと考えているんだ!!」

「ぐっ!!」

隣の席に座ってる深夏に殴られました。

「ぐっ、深夏!! いきなり殴るなよ」

「お前が周りの女子を厭らしい目で見てるのがいけないんだろう!!」

「そうか、俺が構わないから寂しかったんだな、大丈夫だ俺はお前の事もちゃんとハーレムの一員として見ているから」

「お前のハーレムの一員なんかになった覚えもないしなりたくもない

よ

「またまた、照れちゃって、深夏は恥ずかしがり屋だな」

「挟り込むように打つべし、打つべし」

「ぐは、げふ」

『2人とも相変わらずだね』

「「あ、自称神（笑）」」

『自称じゃないよ！？ しかも（笑）って酷くない！！』

『妥当な判断だね』

『ケイまで！？』

俺と深夏が楽しく話していると自称かm『自称じゃないよ！！』
神とケイがやってきた。

「それにしてもがっ子が変わっても結局杉崎の隣か」

「これはもう俺と深夏が運命で繋がれてるって言うことの証明だな
！！」

「いや、これ運命って言うよりも呪いのたぐいだと思うが」

そう言って深夏がため息をつく。と前の扉が開いて先生が入ってきた。

「全員揃ってますね。それじゃあS H Rはじめますよー」

教室からの返事はない。なぜなら女子はみんなこの学園に2人しか居ない俺と織斑先生の弟を見ているからだ。

と言うかあいつを見ていると何故か守と被るのだがもしかしてあいつも超能力が使えるのか？

そんな事を考えていると彼も考え事をしていたのか先生に呼ばれるのにも気づいていないようだ。

「……………くん・斑・夏・織斑一夏くん」

「は、はい！」

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

「わ、わかりました」

そう言ってこっちの方に向いて

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

と言う。他の女子がまだ何か言わないか期待していると織斑は息を吸って、

「以上です」

その瞬間ほとんどの女子がこけた。そしていつの間にかに織村の後ろに居た織斑先生が出席簿を一閃

バキ！！

うん、俺は何も見えていない。出席簿が出してはいけない音を鳴らして織斑の頭をたたいたところとか見ていない！！

「げ、関羽！！」

ドカ！！ バキ！！ メリ！！

3連発で出席簿が振られた。

「誰が三国志の英雄だ」

「あ、織村先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかった。」

そう言うと織斑先生はこちらを向くと

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は若干15歳を16歳までのに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

何と言つか無茶苦茶だな。

「キヤー！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学校に来たんです！ 北九州から！」

何と言うか人気者だな。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

くっ、下手したらハーレム王である俺よりも人気かもしれない。

「いやハーレム王ではないし、下手なくってもお前より人気だから」

「そんなことはない！！ 女子の間では俺は人気者なんだぞ！！」

『『「鍵、現実を見ようよ」』』

「三人とも酷くない！？」

「その馬鹿ども！！ 私語は慎め！！」

織斑先生に怒られました

「ついでだその馬鹿も自己紹介をしろ」

そう言っただけ俺を指名してきた。しょうがない自己紹介をするか。

「ただの人間には興味ありません、この中に」そこから先はいわせねえよ!!」…チッ」

「ちゃんとした自己紹介をしろ!!」

「分かったよ。では…俺の名前は杉崎鍵です。とりあえずISを使える男だ。将来の夢はハーレム」そろそろ授業の時間だ。各自しっかりと準備しろ」って最後まで言わせてよ!!」

こうして俺たちのIS学園での生活が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7264t/>

ISの一存

2011年11月30日01時51分発行